

光源氏の老い

権 桃楹

序

若菜上巻には「さるは、今年ぞ四十になりたまひければ、
…」(④若菜上54¹)と、源氏の年齢記述に導かれたかのよう
な形で、玉鬘によって開かれる若菜献上の賀宴が設けられ
ている。言うまでもなく、四十歳という源氏の年齢は、藤
裏葉巻の「明けむ年四十になりたまふ、…」(③藤裏葉454)
とある叙述を受けてのものである。このような源氏の年齢
記述は「特定の年齢に確定することがぜひとも必要」だっ
た物語の都合によるもののように思う。物語は、もはや若
いと言えない四十歳の源氏が十三四歳の内親王の降嫁を受
ける事件を語ることで、第一部世界で築き上げた彼の栄華
を維持させつつ、六条院を暗鬱な空間に変える準備をした。

謂わば、女三の宮の降嫁は後続する紫の上の苦惱と柏木に
よる密通事件を語るための序幕なのである。

四十歳と十三四歳という、一見不釣合いに思われる、年
齡差のある男女関係に導かれる第二部の物語は、六条院の
栄耀を虚飾として撥ねあげてその中に抱え込まれた深刻な
矛盾を突き出しながら、時間の進行に受動的になるほかな
い源氏の様子を形作っていく。^③と同時に、物語は第一部世
界で源氏の持っていた超人的美質を保持させてもいる。^④第
二部世界には、両立不可能に見えるものを両立させる不可
思議な論理があるように思われ、その論理が必ずしも解き
明かしくされたと言えないように思う。そのような第二
部世界の論理を究明する試みの一環として、本稿では源氏
の「老い」の様子に注目してみたい。

この物語における、「老い」を伴う言葉に関しては、永井和子氏の綿密な検討を施した研究があるが、私には精神の成熟と肉体の衰えという「老い」の両義性が、第二部世界の源氏造型に深く関わっているように思われる。以下にそのことを、若菜上巻を中心に、若菜下巻や柏木巻・横笛巻までを視野に入れつつ、考えていく。

一、女三の宮を降嫁させるために

女三の宮の婿選びが一段落したのちの物語は、四十歳になつた源氏の年齢を殊更に取り上げるかのように、玉鬘によつて開かれる若菜献上の賀宴を繰り広げる。源氏は賀宴を終えて帰ろうとする玉鬘に、

かう世を棄つるやうにて明かし暮らすほどに、年月の行く方も知らず顔なるを、かう数へ知らせたまへるにつけては、心細くなむ。時々は、老やまさると見たまひくらべよかし。かく古めかしき身のところせさに、思ふに従ひて対面なきいと口惜しくなむ(④若菜上61)と、四十歳の賀宴を催してくれたことを感謝し、彼女との別れを惜しむ言葉を発した。が、その言葉は、「心細し」・「老」・「古めかしき身」などと、彼の自覚する老いに関連するものである。源氏が、四十という年齢から「時間には

勝たれないのちのわびしさ」を自覚していると推測でき、このような源氏の自覚が、四十歳になつた主人公の造型に関わると推察できよう。しかし、物語の造型する四十歳の源氏像を考えるに際しては、次に掲げる彼の様子も看過してはなるまい。物語は、源氏に老いを感じさせる一方、若菜献上の賀宴を催す玉鬘の目を借りるかのようにして、

(源氏ハ)いと若くきよらにて、かく御賀などいふことは、ひが数へにやとおほゆるさまの、なまめかしく人の親げなくおはしますを、…(④若菜上56)

と、四十歳にして、若くあり続ける主人公の様子を伝える。玉鬘の催した若菜献上の賀宴における源氏は、若さと老いという対立的性質を一身に備えている人物となつて、このところが、このような源氏造型が玉鬘による若菜献上の際に初めて表れたとは考えられない。若さと老いという対立的性質を備える源氏像は、女三の宮の降嫁を語るところにすでに見えていたように思われる。

女三の宮の婿選びには、「(女三ノ宮ヲ)見はやしたてまつり、かつはまた片生ひならんことをば見隠し教へきこえつべからむ人のうしろやすからむに、預け聞こえばや」(④若菜上27)と語られる条件にかなう人物を物色する、朱雀院の熟慮が物語られる。その熟慮は、源氏に女三の宮を預

けることを迷う朱雀院が、源氏の美質を捉え直すことで、その迷いを切り捨てていく過程とも言えよう。

物語は、

まことに、かれ（源氏）はいとさまことなりし人ぞかし。今はまた、その世にもねびまさりて、光るとは、これを言ふべきにやと見ゆるにほひなむ、いとど加はりたる。

（④若菜上26）

と、源氏を褒め称える朱雀院の言葉传达了時点で、すでに、女三の宮の婿には源氏しかいないことを顕わにしたと思う。「光」に象徴される超人的美質に支えられてきた源氏を婿に内定していながらも、その「光」の裏面を取り上げるべく、物語は愛娘を源氏に預けることを躊躇する父親朱雀院の様子を語る。源氏に女三の宮を預けることを躊躇する朱雀院の様子は、

（朱雀院）「いで、（源氏ノ）その旧りせぬあだけこそは、いとうしろめたけれ」とはのたまはずれど、げに、（女三ノ宮ガ）あまたの（源氏ノ妻達ノ）中にかかづらひて、めざましかるべき思ひはありとも、なほやがて親ざまにさだめたるにて、さもや（源氏ニ）譲りおきこえましなども（朱雀院ハ）思しめすべし。

（④若菜上28）

とあるところから窺えよう。朱雀院は源氏の「旧りせぬあ

だけ」のために愛娘を預けることに迷いを感じていたが、すぐさま考えを変えて、「雲居雁カラ」外ざまに思ひ移ろふべくもはべらざりける」（④若菜上28）夕霧よりは、「なほいかなるにつけても、人をゆかしく思したる心は絶えずものせさせたまふ」（④若菜上28）源氏の方が良いという、女三の宮の乳母の言葉を首肯し、源氏に「女のあざむかれむはいとことわり」（④若菜上28〜29）だという理解を示す。このような朱雀院の態度変化から、源氏の好色を、不安を感じさせる要素から超人的美質を感じさせる要素へと据え直そうとする物語の動きが読み取られよう。そのような物語の動きは、好色とともに朱雀院に憂慮されていた源氏の多妻が、「ほどほどにつけて、人の際々思しわきまへつつ、ありがたき（源氏ノ）御心ざま」（④若菜上31）を表すものとして捉え直されることから確認できる。

朱雀院の迷いは、のちに今上帝となる春宮から「かの六条院にこそ、親さまに譲りきこえさせたまはめ」（④若菜上39）という支持を得て、漸く終止符が打たれる。物語の目指す方向通りに、源氏を婿にしようとの内意を決めた朱雀院は、左中弁に取り次いで、それを源氏に伝える。だが、源氏は、

心苦しき御事にもあなるかな。さはありとも、院（＝

朱雀院の御代の残り少なしとて、ここ（＝源氏）にはまたいくばく立ち後れたてまつるべしとてか、その御後見のこと（＝女三ノ宮ノ降嫁）をば承けとりきこえむ。げに次第をあやまたぬにて、いましばしのほども残りともる限りあらば、おほかたにつけては、いづれの皇女たちも、よそに聞き放ちたてまつるべきにもあらねど、またかくとりわきて聞きおきたてまつりてむをば、ことにこそは後見きこえめと思ふを、それだにいと不定なる世の定めなさなりや

（④若菜上39〜40）

という言葉をもって院の内意を謝絶する。朱雀院の内意が少ないからと言って院より三歳下の自分の余命が多く残っているとは限らず、下手をすると朱雀院より自分の方が先立って世を去るかも知れないということである。源氏は自分の余命の少なさのために女三の宮の婿を辞退し、「年若く軽々しきやうなれど、行く先遠くて、人柄も、つひに朝廷の御後見ともなりぬべき」（④若菜上40）夕霧を推薦した。だが、出家した朱雀院と対面した源氏は、その考えを変えて、

中納言の朝臣（＝夕霧）、…何ごともまだ浅くて、たどり少なくこそはべらめ。かたじけなくとも、深き心に

て（女三ノ宮ヲ）後見きこえさせはべらん、おはします御蔭（＝朱雀院）にかはりては思されしを、（源氏ハ）ただ行く先短くて、仕うまつりさすことやばべらむと疑はしき方のみなむ、心苦しきはべるべき（④若菜上49）と述べ、女三の宮の降嫁を承引する。源氏が突然態度を変えて女三の宮の降嫁を承引した理由は、降嫁三日目の夕方に、もの思いに沈んでいる紫の上の気配を察した彼が、「なごで、よろづのことありとも、また人を並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし」（④若菜上63〜64）と、それを後悔するように、源氏の心弱さにあつた。朱雀院への人間的な同情と女三の宮への好色とに心を動かされた源氏は、雲居雁と結ばれる前の夕霧に女三の宮を預ければ良かったと後悔する朱雀院に異議を唱えて、自ら進んでその降嫁を引き受けたのである。このような展開は、言うまでもなく、女三の宮の降嫁後に繰り広げられる紫の上の内的苦悩を導き出す布石として考えられる。

物語は、紫の上の内的苦悩を語るために、女三の宮の婿選びを通して、第一部世界で描かれた源氏の超人的美質に負の面が付随することを提示した、とまずは言えよう。そして、その負の面は女三の宮の降嫁後に繰り広げられる紫

の上の内的苦悩を語るところに受け継がれていとも言えよう。が、女三の宮の降嫁に導かれる柏木の密通事件においては、それが見えなくなっているように思う。紫の上の内的苦悩と柏木の密通事件を繋ぐ物語の方法はもはや時間の経過以外にはないように見える。が、女三の宮の降嫁に導かれて繰り広げられる二つの内容を語る叙述―紫の上の内的苦悩を語る内容と柏木による密通事件を語る内容―における源氏が、共通して老いを自覚することを看過してはならない。柏木による密通事件における源氏の自覚は少々後回しにし、次節では源氏による老いの自覚が紫の上の内的苦悩とどのように関わるかを考えたいが、その前に朱雀院の内意を辞する源氏の言葉にも老いの自覚があったことを確認しておく。

「心苦しき御事にもあなるかな。」で始まる源氏の言葉をすでに引用し、降嫁を謝絶する源氏の様子も見た。そこにおける源氏の老いは、繰り返して言及されていた余命の少なさと、後続して「行く先遠く」と叙述される夕霧の若さなどが対峙する関係によって強調される。源氏による老いの自覚は、朱雀院と対面した際に、女三の宮の降嫁を承引した彼が「行く先短くて、仕うまつりさすこと」を憂慮するところにも繰り返されるが、その繰り返しからも源氏によ

る老いの自覚が女三の宮の降嫁を謝絶するために発した、単なる口実ではないことが確認できる。物語は、朱雀院の内意に対する謝絶を語ることを通して、源氏に老いの自覚を持たせているのではないだろうか。四十歳を目前にした源氏には、十三四歳の女三の宮の婿として相応しい超人的美質とともに年老いたという自覚が備わっており、物語はそのような源氏像を照らし出しながら女三の宮の婿選びを展開させるのではないだろうか。その婿選びが一段落したところで、物語は玉鬘の目を通した源氏を「いと若くきよら」な人物に造型しており、一見したところ、そのような造型は女三の宮の降嫁とは無関係なように見える。しかしながら、その造型は四十歳の源氏が十三四歳の女三の宮と結ばれる展開が強引ではないことを示すためには必要不可欠だったのではなからうか。そして、玉鬘の目に映った源氏の若さは、老いを憂慮する源氏の言葉を一向に気にしないで彼を女三の宮の婿にする朱雀院の行動を裏付ける。と同時に、四十歳という源氏の年齢が若さと老いとの共存する境界的なものだと示してくれるのである。

二、源氏を孤立させる論理

出家した朱雀院との対面で女三の宮の降嫁を承諾はした

ものの、源氏は心苦しい思いだった。女三の宮の降嫁を、「今の年ごろとなりては、ましてかたみに隔てきこえたまふことなく、あはれなる御仲」(④若菜上51)となつてゐる紫の上がどう思ふかと危惧したためである。源氏は、一夜を置いてその次第を最愛の妻に伝えるが、それに際して彼は、

(ア)今はさやうのこと(＝好色事)もうひうひしく、すまじく思ひなりにたれば、(朱雀院ガ)人づてに気色ば

ませたまひしには、とかくのがれきこえしを、(朱雀院トノ)対面のついでに、心深きさまなることどもをのたまひつづけしには、えすくすくしくも返さひ申さでなむ。(④若菜上51)

という言葉を用いる。源氏の発した言葉の全文ではないが、源氏の伝えようとする趣旨が一目瞭然の部分である。源氏は、左中弁に伝えられた朱雀院の内意を一度謝絶したことを引き合いに出して、女三の宮の降嫁を承諾した理由がひたすら院への同情にあると紫の上に力説した。が、すでに確認したように、源氏には女三の宮に対する興味もあった。源氏は、紫の上の心を傷つけまいという思いで、年老いた「今」は「旧りせぬあだけ」を持たないと言いながら、女三の宮降嫁の次第を伝えたのである。

源氏の報告を聞いた紫の上は、「おのがどちの心より起こ

れる懸想にもあらず、堰かるべき方なきものから、をこがましく思ひむすほほるるさま世人に漏りきこえじ」(④若菜上53)という思いで降嫁に対処した。降嫁を、女三の宮と源氏の心の通じ合った結果ではないと捉えるところからは、(ア)の源氏の報告を素直に受け入れている紫の上の様子が窺えよう。紫の上は、好色による源氏の心変わりを心配しない^⑤で、夫を完全に信頼していたのである。

源氏の愛情をすっかり信じ切つてゐる紫の上の様子は、源氏が朝顔の前齋院に求婚し、拒絶された一件を回想するところから確認できる。紫の上の回想は「(源氏ガ)前齋院をもねむごころに聞こえたまふやうなりしかど、わざとしも思し遂げずなりにしを」(④若菜上50～51)と語られるが、この回想からは、夫があえて執着を捨てたために朝顔の前齋院との関係が成立しなかつたと恣意的に解釈する紫の上の様子が察せられよう。源氏に対する紫の上の信頼は誤解に基づいていたとも言えようが、そのような誤解を根拠に、彼女は源氏が女三の宮の降嫁を承諾するはずがないと油断していた。

源氏が女三の宮の降嫁を承諾するはずがないと油断していた紫の上は、源氏にそれが決定したことを告げられたのちに、

(イ) (紫ノ上ハ) 今はさりともとのみわが身を思ひあがり、
うらなく過ぐしける世の、人笑へならむことを下には
思ひつづけたまへど、いとおいらかにのみもてなした
まへり。 (④若菜上54)

と、その生き方を反省的に捉える。紫の上には源氏が好色であつても六条院における彼女の立場は脅かされないう自信があつた。その自信は、(イ)に見る「今」に対する彼女の信頼に基盤をおいており、「今の年ごろとなりては、ましてかたみに隔てきこえたまふことなく、あはれなる御仲」という叙述とも符合する。紫の上は、源氏とともに過ごしてたどり着いた「今」を過信していた生き方が笑いものにされるのではないかと反省しながらも、表面的には平静を装っていた。だが、彼女は自分の生き方を反省的に捉えるものの、(ア)において好色な興味を持たないと言つた源氏を信じ続けていた。物語は、源氏を信頼する紫の上の内面を、

(ウ)年ごろ、さもやあらむと思ひしことどもも、(源氏ハ)
今はこのみもて離れたまひつつ、さらばかくにこそは
と、うちとけゆく末に、かく世の聞き耳もなのめなら
ぬこと (ニ女三ノ宮ノ降嫁) の出で来ぬるよ、思ひ定む
べき世のありさまにもあらざりければ、今より後もう

しるめたくぞ思しなりぬる。

(④若菜上65-66)

と語る。(ウ)の引用には、女三の宮の降嫁三日目の夕方に源氏を見送つた紫の上の心境が語られ、(イ)の引用と類似するかに見える。が、源氏との関係を「思ひ定むべき世のありさま」ではなかつたと捉え、将来に対する不安を抱えている紫の上の様子からは、(イ)に比べて「今」に対する信頼がさらに薄らいでいることが確認できよう。ともあれ、長年源氏の愛情が他の女君に移るのではないかと心配してきた紫の上が、「うちとけゆく末」の出来事として女三の宮の降嫁を捉えるところからは、すくなくとも女三の宮の降嫁がある以前の彼女は、好色による源氏の心変わりを心配しないでいたと言えよう。そのように源氏を信頼する紫の上の様子は、朝顔の前斎院に関する一件を恣意的に捉える様子や女三の宮の降嫁を「おのがどちの心より起これる懸想」によるものではないと捉える様子とも照応していよう。これらのことから、紫の上が源氏を信頼する根拠が、(ア)で好色には興味を持たない根拠として源氏の提示した、「今」と響き合っていると云えるのではないか。女三の宮の降嫁以降の物語が、(ア)において提示された、源氏の「今」を見定めていく紫の上の様子を取り上げているように思われる所以である。

女三の宮の降嫁があつてから、「姫宮の御事（＝女三ノ宮ノ降嫁）の後は、何_レとも、いと過ぎぬる方のやうにはあらず、すこし隔つる心添ひて、…」(④若菜上79)とあるように、紫の上は源氏との距離を感じるようになっていた。

紫の上の抱えるようになった「隔つる心」は、降嫁五日目に源氏に送られた手紙からその幼稚さを見抜いた、女三の宮のために生じたものではないだろう。幼稚な女三の宮に源氏が心移ることを紫の上が心配したとは考え難い。紫の上が抱えるようになった「隔つる心」の問題を考えるためには、後続して語られる源氏と朧月夜との逢瀬も視野に入れておく必要がある。

(エ) (源氏ガ) いみじく忍び入りたまへる御寝くたれのさまを待ちうけて、女君（＝紫ノ上）、さばかりならむと心得たまへれど、おほめかしくもてなしておはす。…(源氏ハ) ありしよりけに深き契りをのみ、(紫ノ上ニ) 長き世をかけて聞こえたまふ。尚侍の君（＝朧月夜）の御事も、また漏らすべきならねど、いにしへのことも知りたまへれば、まほにはあらねど、「物越しに、はつかなりつる対面なん、残りある心地する。いかで人目咎めあるまじくもて隠して、いま一たびも」と語らひきこえたまふ。(紫ノ上ハ) うち笑ひて、「いまめかしくも

なり返る御ありさまかな。昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」とて、さすがに涙ぐみたまへるまみのいとらうたげに見ゆるに、…

(④若菜上85)

四十歳にして青年の日の忍び歩き姿をした源氏の様子に際立つ朧月夜との逢瀬を語ったのちに、物語は(エ)の場面を設ける。(エ)における紫の上の言葉は、『伊勢物語』三十二段の「いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」や二十一一段の末尾の「中空にたちある雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかな」の歌を引歌にしたもので、そこからは自分の苦悩を知っているながらも朧月夜との情事に走る源氏への非難と心細い境遇を嘆く紫の上の心境とが読み取れよう。それにおいては、まず、(ウ)で「さもやあらむと思ひしことどもも、今はとのみもて離れたまひつつ」あると、源氏に対する信頼を見せていた紫の上が、「いまめかしくなり返る御ありさま」だという皮肉をもつて夫の好色を非難していることを押さえておきたい。引用(エ)における紫の上は、女三の宮の降嫁による苦悩を知っているながらも好色に振る舞う源氏が所詮は他人に過ぎないという距離感を明確に感じとつたために、自分の境遇を嘆いた。その際に彼女は、距離感を感じさせる源氏の様子を、『細

流抄』の指摘通りに「わかわかし」の意である、「いまめかし」という言葉で形容した。紫の上は年老いた源氏には若い頃に変わらない好色ぶりが釣合わないと皮肉ったのである。この皮肉を、紫の上が、(ア)において源氏の発した、年老いたために好色なことに興味を持たないという言葉を信頼していたことや、自らを「源氏ノ」御心にかなひていまめかしくすぐれたる際」ではない妻たち(④若菜上66)の一人に位置させていたことに照らし合わせると、引用(エ)において紫の上の感じる距離感の正体が顕れて来る。紫の上は、好色なことには興味を持たないとばかり信じていた夫が、依然として若い頃に変わらない好色人であると見定めたために距離感を覚えたのである。

ここで、女三の宮の降嫁五日目の源氏が、「ゆめにもかかる人の親にて重き位と(源氏ハ)見えたまはず、若うなまめかしき御さま」(④若菜上71)と描かれていたところに關しても触れておきたいが、私は、若い頃に変わらない好色人という源氏の様子がそこですでに顔を出していたのではないかと思う。そして、六条院の東の対で女三の宮の手紙を待っている「若うなまめかし」い源氏と居合わせていた紫の上が、老いの背後に隠された夫の好色を、薄々でありながら、感知したと思う。紫の上の抱いた「隔つる心」は、

その感知に起因するということである。

私には、以上に見てきた紫の上の意識が、益田勝実氏の論じた「青春期が描かれる古代文学の伝統から離れ」た「中年期の人生の問題」⁽¹⁰⁾を、「光」に象徴される源氏独自のものにしていくように思われる。物語は源氏の老いというものを登場人物たちの主観的な視点に即して描くことで、時間の流れに蝕まれない超人的美質と老いとを両立させることができたのではないだろうか。

ところで、四十歳の源氏を若い頃に変わらない好色人として認識していたのは、紫の上だけでない。六条院に住む花散里や明石の君の目にも源氏は若い頃に変わらない好色人として映っていた。花散里が源氏の好色を捉える様子は、「ものの例(＝嫉妬シナイ女性ノ例)に引き出でたまふほどに、身の人わろきおほえ(＝源氏ニ愛サレナイツイウ評判)こそあらはれぬべう。さてをかしきことは、院(＝源氏)の、みづからの御癖をば人知らぬやうに、…さかしたつ人の己が上知らぬやうにおほえはべれ」(④夕霧41)と、花散里の穏やかな性格を称賛する夕霧に対して彼女が、己の身の上を省みずに夕霧の好色を戒めた、源氏への非難を漏らすところから確認できる。そのような花散里の目にも、六条院の東北の町に設けられた四十賀の際に源氏は、「なほいと若

き源氏の君」(④若菜上47)と映っていた。なお、明石の君の源氏を捉える様子は、

(オ)あなうたてや。いまめかしくなり返らせたまふめる御心ならひに、聞き知らぬやうなる御すさび言どもこそ時々出で来れ (④若菜上125)

とあるところに窺える。明石の女御の出産があつてから、六条院の北の町にいる明石の尼君には、別れを告げる言葉と明石一族の奇異な運命をかたどつた夢に関する話が記された、明石の入道からの消息が文箱とともに届く。それは明石の君の手によつて、南町の寢殿にいる明石の女御の許にもたらされる。生みの母明石の君の出家の意志とともにそれを伝えられた女御は涙ぐみ、「いとあはれ」(④若菜上124)だと思つてますます袖を濡らす。ちよつどその時、女三の宮のいる寢殿の西側から源氏が渡つて来、「なぞの箱ぞ。深き心あらむ。懸想人の長歌詠みて封じこめたる心地こそすれ」(④若菜上125)と、冗談を言いかける。引用(オ)は、源氏の冗談に対する明石の君の皮肉で、(エ)における紫の上の皮肉と類似する。明石一族の悲壮な運命をもつて築き上げた物語の雰囲気を一気に打ち壊すような源氏の冗談は、年老いてなおも若い頃に変わらない好色人の源氏が、明石一族の悲しみに融和できないことを示している。物語は、

年老いた源氏をなおも若い頃に変わらない好色人に仕立てることで、彼を孤立させている。このような物語の傾向は、先に見た、花散里や紫の上との関係からも見られよう。物語は、歳月の流れに蝕まれない源氏を、六条院の女君たちに確かめさせることで、主人公を孤立させているのである。

三、源氏の自覚する老い

前節では周りの視線によつて浮上する、源氏の超人的美質に関して述べ、その末尾に源氏を孤立させる物語の論理を確認した。本節では、少々視角を変えて、源氏自身による老いの自覚に関して考えたい。

すでに確認したように、周りの登場人物たちに若い頃に変わらない好色人として認識される源氏は、それに反撥でもするかのように、年老いたという自覚を抱きつつあつた⁽³⁾。老いを自覚する源氏の様子は、朱雀院との対面で女三の宮の降嫁を承引する際や玉鬘による若菜献上の際にも見られたものであつた。そして源氏による老いの自覚は、「若々しくいにしへに返りて」(④若菜上78)和泉前司に指し示した臘月夜との対面を「心ながらもゆるさぬこと」に思うところ(④若菜上84)からも確認できる。源氏は好色な行爲が不釣合いな老人だと自らを自覚していた。このよう

に、老いの自覚を持つ源氏の様子は、すでに述べたように、若菜上・下巻を貫くものである。若菜下巻で老いを自覚する源氏の様子は、

(A) 過ぐる齡にそへては、酔泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門督(＝柏木) 心とどめてほほ笑まるる、いと心恥づかしや。さりともし、いましばしならむ。かさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり。

(④若菜下280)

とある、女三の宮と密通を犯した柏木に対して発した言葉に著しく表れる。朱雀院五十賀の試楽を語る場面で「御孫の君たち」(④若菜下279)の舞に導かれたかのように仕組まれている(A)からは、源氏の自嘲と柏木への痛烈な皮肉が読み取られ、年老いたという劣等感を覚えている彼の様子が窺える。が、密通の事実を知った直後の源氏は「わが身ながらも、(女三ノ宮ガ)さばかりの人(＝柏木)に心分けたまふべくはおぼえぬ」(④若菜下255)と、柏木に比肩できないほど優れていると己を位置づけていた。これらを、女三の宮が自分より劣る柏木に心惹かれたと思う源氏が、宮の前で、「人の上にてもどかしく聞き思ひし古人のさかしらよ、身にかはるることにこそ。いかに、うたての翁やと、(女三ノ宮ハ)むつかしくうるさき御心添ふらむ」(④若菜下271)

と老いを自嘲することに照らし合わせると、彼は女三の宮が柏木の若さに心惹かれたと誤解していたと考えられる。旧世代を脅かす新世代として柏木を位置づける所以だと思ふが、ここでは第二部世界で源氏が老いを自覚する方法を確認したい。

(B) 過ぐる齡も、みづから(＝源氏)の心にはことに思ひとがめられず、ただ昔ながらの若々しきありさまにて、改むることもなきを、かかる末々のもよほし(＝玉鬘ノ子)になむ、なまはしたなきまで思ひ知らるるをりもはべりける。中納言(＝夕霧)のいつしかと(子供ヲ)儲けたなるを、ことごとしく思ひ隔てて、まだ見せずかし。人よりことに数へとりたまひける今日の子の日こそ、なほうれたけれ。しばしは老いを忘れてもはべるべきを

(④若菜上57)

(B)は、若菜献上の賀宴のために、髭黒との間に産まれた子供たちを連れて六条院を訪れた玉鬘に、源氏の発した冗談である。そこにおける源氏には、老いを厭うかのような姿勢があり、その姿勢は(A)の老いに対する姿勢とも通じるかに見える。が、(B)は、四十歳を祝うために子供たちまで連れてきた玉鬘に対する、謝意の込められた冗談である。その冗談における老いの質を、激しい喪失感を伴う(A)にお

けるそれと同一視することは難しいように思う。ともあれ、(B)における源氏は、以前に変わりなく若いとばかり思っていると言ひ、玉鬘の産んだ子供たちを見てきまりわるいくらい老いを実感すると言ひながら、子供を見せない夕霧の話を持ち出して冗談を言い続ける。しばらくは老いを忘れていたいと言う後続の言葉に照らして考えると、源氏が子供を見せてくれた玉鬘よりも「末々のもよほし」を見せない夕霧を良しとしているかに見える。だが、その真意は、

(C)大殿の君(＝源氏)も、このほどのことども(＝産養)は、例のやうにもことぞがせたまはで、世になく響きこちたきほどに、内々のなまめかしくこまかなるみやびの、まねび伝ふべきふしは目もとまらずなりにけり。大殿の君(＝源氏)も、若宮(＝今上帝ノ春宮)をほどなく抱きたてまつりたまひて、「大将(＝夕霧)のあまた儲けたなるを、今まで見せぬがうらめしきに、かくらうたき人をぞ得たてまつりたる」と、うつくしみきこえたまふはことわりなりや。

(④若菜上110)

とある場面で、源氏が子供を見せない夕霧に言及するところから確認できる。(C)には、いつもとは違って盛大な産養いを設けて可愛い孫の誕生を喜ぶ源氏の様子が垣間見られる。孫を可愛がる源氏は子供を見せない夕霧の行為に関し

ては「うらめし」と言うが、この言葉から(B)の冗談の裏面に潜む源氏の真意が推察できる。(B)における源氏は、玉鬘の子供たちに老いを知らされたものの、やはり玉鬘が子供たちを連れてきたことが嬉しかったようである。にもかかわらず、(B)での源氏は玉鬘や夕霧の子供たちを「末々のもよほし」だと言ひ、それによつて知らされる老いが厭わしいと言つていた。だが、(B)と同様に「末々のもよほし」によつて老いを知らされているはずの、(C)における源氏は若宮の誕生によつて一層堅固になり行く将来の栄光に期待をかけているように見える。源氏の期待は普段に異なつて盛大な産養いを設けるところから察せられようが、その際に源氏の自覚する老いは、(B)において厭わしいものとして彼の自覚していた老いとは異質なものになっている。老いに対する源氏の自覚に変化が生じたと言えよう。

ここで、右のように源氏の自覚する老いが、物語によつてかたどられる孤立した老いと合致しないことに関しても少し触れておきたい。(C)における源氏の将来の栄耀は、物語が明石の入道の夢に始まる明石一族の運命をたどることで、明石一族に帰属される⁵⁾。前節に確認した源氏の孤立を考え合わせると、物語が他の人物と共感し得ない源氏像を積み重ねていくことで孤立した源氏の老いを形作っている

と言えよう。物語は六条院の女君たちに認識される源氏の老いや、源氏の自覚してきた老いとは異なる質の老いを形作っているのである。無論、源氏は(B)においてすでに、命の衰えという老いの性格を知っており、その自覚は物語の醸し出そうとする老いと合致するかに見える。だが、源氏は衰えという老いの性質を知っていながらも、事件の作り出す状況に応じて老いに対する自覚を変えつつあるように見える。その変化の様相はさらに次の(D)で確認できる。

(D) (源氏「あはれ、残り少なき世に生ひ出づべき人(=薫)にこそ」とて、(薫ヲ)抱きとりたまへば、(薫ハ)いと心やすくうち笑みて、つぶつぶと肥て白ううつくし。：(源氏)「静かに思ひて嗟くに堪へたり」とうち誦じたまふ。(源氏ハ)五十八を十とり棄てたる御齡なれど、末になりたる心地したまひて、いともあはれに思さる。(源氏)「汝が爺に」とも、(薫ニ)諫めまほしう思しけむかし。」

(④ 柏木 322-324)

引用(D)には柏木と女三の宮の密通によって生まれた「末々のもよほし」の薫を抱いた源氏の内面が語られる。薫の五十日の祝の際に不義の子をわが子として抱いた源氏は己の余命の少なさを痛感する。そのような老いの自覚は、一見したところには女三の宮の降嫁を承諾する際のそれと

似ているかに見える。だが、「末々のもよほし」の薫によって知らされる老いは、女三の宮の降嫁の際に源氏の自覚していたそれに比べられないほど深刻なものとなっていて、彼の「孤独な心」⁽¹⁶⁾を浮き彫りにする。私は、(D)に至って漸く物語のかたどる源氏の老いと源氏の自覚するそれとの間に歪みが消え去り、両者が歩幅を合わせるようになったと思う。老いを痛感する孤独な源氏の内面は「思しけむかし」とあるように、その人生を語ってきた語り手さえ推測できか捉えることができないものになっている。それは源氏の自覚するようになった老いの暗鬱さが、物語の形作ってきた老いの暗鬱さを遙かに越えていることを意味しよう。源氏の自覚する老いは物語の牽引してきた老いと同質なものになったのである。

結びにかえて

以上に若葉上巻を中心に、柏木巻までを視野に入れつつ、三つの層から取り上げられる源氏の老いに関して考察してきた。三十九歳から四十八歳に至るまでの源氏は、老いの自覚と超人的美質とを兼備していて、孤立する人物であった。物語は孤立する源氏の様子を語ることで、衰えていく命のわびしさを感じさせる源氏の老いを形作った。と同時に

に、登場人物たちの主観的視線を通すことで、歳月の流れに蝕まれない若々しさを備えたまま年老いた源氏を造型できた。物語は源氏の老いを多層化することによって、中期の源氏の人生を豊富にできたのである。そのような中期を源氏は年老いたという自覚を持って過ごしたが、その老いの質は状況に応じて変化しつつあった。

源氏の晩年は、彼の自覚する老いが初めて深刻な暗鬱さを帯びるようになって始まったのではないだろうか。「末々のもよほし」の薫と対面した源氏が、その成長を見届けられないと、衰え行く命のわびしさを初めて痛感した時、彼の晩年の物語が始まっているのである。だが、源氏の晩年における老いは衰え行く命のわびしさだけを物語っているわけではない。薫との対面が設けられて以降の源氏の老いは、なおも多様な意味を帯びる。そのような源氏の老いは、「宮の若君（＝薫）は、宮たち（＝明石中宮ノ皇子達）の御列にはあるまじきぞかしと（源氏ハ）御心の中に思せど、…（薫ヲ）いとらうたきものに（源氏ハ）思ひかしづきさこえたまふ。」（④横笛364）とあるところに象徴的に表れている。「末々のもよほし」によって知らされる老いには、栄耀と命の衰えとが共存しており、源氏はなおも多義的な人生を生きているのである。

【注】

(1) 以下源氏物語や伊勢物語の本文引用は、小学館の新編日本古典文学全集を用いる。なお、源氏物語の引用の際には、巻数・巻名・頁数を記す。本文には見やすさをはかつて傍線・二重傍線・波線・点線・傍点等を施す。

(2) 高田祐彦「光源氏の賀宴―儀礼と心の関係―」『叢書 想像する平安文学 第2巻（平安文化）のエクリチュール』勉誠出版平成13年10月

(3) 秋山虔「源氏物語の方法に関する断章―「若菜」巻における明石物語・続―」『源氏物語とその周辺―古代文学論叢第二輯―』武蔵野書院昭和46年6月、同「外的時間と内的時間―「若菜上」巻における明石物語、その一―」『国文学』昭和45年5月

(4) 室田知香「柏木物語の引用的表現とその歪み―「帝の御妻をも過つたぐひ」の像と柏木―」『日本文学』平成19年12月）が、第一部の偉大な過去の源氏像と柏木に畏怖されつづける六条院の像とが二重映しされつつあることを論じた。

(5) 永井和子「老いということば―源氏物語の場合―」『源氏物語と老い』風間書院平成7年5月

(6) 秋山虔「源氏物語の方法に関する断章―光源氏四十賀の記事をめぐる―」『日本文学古典新論』河出書房新社 昭和

37年12月

- (7) 秋山虔「若菜」巻の始発をめぐって」(『源氏物語の世界―その方法と達成― 東大人文科学研究叢書』東京大学出版会昭和39年12月)は、作者が「光の理想像」を繰り返し語るることと「光源氏と女三宮との結合」をもくろむことを指摘する。
- (8) 吉岡曠「若菜・柏木物語論序説」『学習院大学文学部研究年報 9号』昭和38年2月
- (9) 吉田幹生「若菜巻の紫の上―「世」への傾斜と「憂し」の不在―」『成蹊国文第三十九号』平成18年3月
- (10) 清水好子「朧月夜再会」『講座 源氏物語の世界(第六集)』有斐閣 昭和56年12月
- (11) 池田節子「いまめかし」考―玉鬘十帖の光源氏―」『物語(女と男)新物語研究3』有精堂 平成7年11月
- (12) 益田勝実「源氏物語の転換点」『日本文学』昭和36年10月
- (13) 注(5)の論考に、「光源氏の場合は自覚的な老齡意識はありえても、客観的な「老い」の問題の対象とはなしがたい。物語の主要人物に「老い」は存在しないのである。」とある。
- (14) 今井源衛「柏木と女三の宮」『国文学』昭和34年8月
- (15) 阿部秋生「第五章 明石の君の物語の構造」『源氏物語研究序説』東京大学出版会昭和24年4月
- (16) 高橋亨「柏木はなぜ自ら死を求めねばならなかったのか」『国文学』昭和55年5月